

# 春一番 若者たちへのメッセージ

弁護士

## 立石雅世さん

さまざまな生き方を、好奇心を持って観察してもらいたいなあと思うことと、自分の意見をキチツと言える大人になってほしいと思います。



二十歳のころは、大学二年生でした。法学部に在籍して、漠然とでしけれど「弁護士になりたいな」と思っていました。

私の生まれ育った環境というのは、父が土地家屋調査士で、母も家事をしながら父の仕事を手伝っていましたから、「女も仕事をするんだ」というふうには、ごく普通に受けとめていました。

私は、吉高の出身なんですけれど、あのころホームルームなんかの意見で多数を占めていたのが、「お嫁さんになりたい」。

そんな考え方に、私とか、あと一部のひねくれた連中は「そんなの、おかしいよね」なんて反発してました。

決して、主婦業を否定していたわけではありませんが、「何か資格を取って世の中に出てみたい」。

結構、生意気なこと言ってましたね(笑)。ですから、そんな延長線上にあった大学二年生であり、二十歳だったと思います。でも、理想と現実の違いも感じていたころ。

授業に出ても、何言ってるのかわからない。六法全書を読んでも、体系的な理解ができないという中で、「これは、なまはんかなことじゃあ受からないな」というのが、ヒシヒシとわかってきて。

人間、楽な方に流れますから、「資格を取るばかりが人生じゃあないな。もっと早く社会に出よう」と、方向転換を考え始めた時期でもありました。

二十歳のときよりもっと深刻だったのは、卒業する前の年くらいのオイルショック。これで、女の子の就職が全然なくなってしまうんです。

それまでは、「何とかなるさ」と思っていたので、さすがにその時は、親の顔が浮かびましたね。

就職難になると、「やっぱり、資格(弁護士)がいいんじゃないか、一生仕事をしていけるし、男女差とか関係ないようだし」。父に、「もう少し勉強させてほしい」って言ったら、「いいよ」って。

ホツとしちゃって。本当は、そこが苦難の道だったんだけれどね(笑)。

私は、こういう道をたどって来たんだけれど、女の人って、どういうふうにごすのがいいのかしらね。

二十歳のころだったら、いろんな選択ができませんね。

ただ、完璧にはなっていない年ですから、いろんな方のいろんな意見や、さまざまな生き方を、好奇心を持って観察してもらいたいなあと思うことと、自分の意見をキチツと言える大人になってほしいと思います。

身じかなところから、そんな訓練をしていったらいいと思いますよ。そんな女の人、ふえるといいなあと思います。

それから、若いからできることも多いと思うから、職場以外の人のつき合いを広げたり、趣味を持つのも必要ですね。もっと、個性を磨かなければあね。



何でもいい。思いきり、メチャメチャにのめり込むのも必要なのではないか。  
恵まれ過ぎていて、かえって感動する心を失っていないか。

**牧田 一郎**さん  
田子の月社長

いい顔をしている人に出会うことがあります。  
いい笑顔で、いい話を聞かせてくれます。  
今回は、二十歳になった皆さんに贈る、本当にいい話。  
二十歳は、人生の大きな節目の年。  
大切な年を、どう過ごすか、どんなふう頑張るか、  
そして、どう楽しむかを、  
いい顔をしてお二人に伺ってみました。  
軽い人にも、まじめな人にも、  
ぜひ読んでいただきたい、取っておきの特集です。

私の甘党は有名です。  
飯に、砂糖をぶっかけて食べるし、お汁粉  
だったら何杯でも。  
行きつけの店でのつまみは、チョコレート  
と甘納豆。  
菓子もよく食べます。  
これは、仕事だから食べるのではなく、本  
当に好きだから食べるわけです。  
おかげで、「だれにも負けないぞ」と自信  
を持っていることがあります。  
それは、いい菓子か、悪い菓子かを見分け  
る目と舌。  
もっとも、最近は医者に甘い物をとめられ  
ているんですがね(笑)。  
私は、「菓子は夢」だと思っています。  
菓子なんか、なくなっちゃいい。  
でも、なければ何か味気ない。  
小さな菓子一つに夢を込めて、うまいと評  
価されるものをつくり続けたいですね。  
しかし、これは私の夢。  
経営者の夢と、社員の夢とが一致しなけれ

れば、会社の成長はないと思っていますし、  
一緒に取り組んでいこうと思っています。  
私は、三十七歳で社長に就任しました。  
親父には、随分厳しくしつけられました。  
経営の厳しさや、「人の心の痛みがわかる  
人間になれ」と。  
今になってありがたいと思うし、昔の経験  
が生きていると思いますね。  
だからといって、今、子供に同じことがで  
きるかと言われるとできませんね。  
親が、子供に操られて入って来ます。  
ことしも、新入社員が入って来ます。  
十人十色がおもしろいの、近ごろは芸達  
者や餓鬼大将がいらない。  
「こいつは、おもしろそうだな」と思う人  
間がない。  
おとなしくて、ワンパターン。  
淡々とした人生を送っているのではないか。  
そう見えますね。  
何でもいい。思いきり、メチャメチャにの  
めり込むのも必要なのではないか。

恵まれ過ぎていて、かえって感動する心を  
失っていないか。  
小さな菓子づくりになって、新しいうまさ  
への挑戦があるし、お客様との出会いもある。  
頭の中を柔軟にして、常に前向きに仕事に  
取り組んでほしいと思いますね。  
仕事のやりがいや生きがいも、本当はどこ  
にでもあるものだと思いますよ。  
私が二十歳のときですか。  
商学部の学生でした。  
金はなくても暇はあったから、アルバイト  
に精を出していました。  
好奇心が強く、いろいろな職業をのぞいて  
見たくて、何でもやりました。  
サウナの三助、弁当売り、コント55号の裏  
方、車の陸送。  
中でも一番よかったのは、ビルの窓ふき。  
夕飯を食わしてくれて五千円。千円が相場の  
時代にですよ。  
自由気ままに、青春を楽しみました。  
遊びに関しては、全く悔いはないですね。



**私が二十歳だったときに**  
はたち